

[B年] 降誕前第7主日(2021年11月7日)**【旧約聖書日課】創世記 15章1～18節**

1これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。

「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

2アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」3アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」

4見よ、主の言葉があった。

「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

5主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

6アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

7主は言われた。

「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」

8アブラムは尋ねた。

「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」

9主は言われた。

「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのものに持って来なさい。」

10アブラムはそれらのものをみな持って来て、真つ二つに切り裂き、それぞれを互に向かい合わせて置いた。ただ、鳥は切り裂かなかった。11禿鷹がこれらの死体をねらって降りて来ると、アブラムは追い払った。

12日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。13主はアブラムに言われた。

「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。14しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。15あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。16ここに戻って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである。」17日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。18その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。」

【使徒書日課】ヤコブの手紙 2章14～26節

14わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つてでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。15もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、16あなたがたのだけれが、彼らに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つてでしょう。17信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。

18しかし、「あなたには信仰があり、わたしには行いがある」と言う人がいるかもしれません。行いの伴わないあなたの信仰を見せなさい。そうすれば、わたしは行いによって、自分の信仰を見せましょう。19あなたは「神は唯一だ」と信じている。結構なことだ。悪霊どももそう信じて、おののいています。20ああ、愚かな者よ、行いの伴わない信仰が役に立たない、ということを知りたいのか。21神がわたしたちの父アブラハムを義とされたのは、息子のイサクを祭壇の上に献げるとい行いによってではなかったですか。22アブラハムの信仰がその行いと共に働き、信仰が行いによって完成されたことが、これで分かるでしょう。23「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」という聖書の言葉が実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。24これであなたがたも分かるように、人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません。25同様に、娼婦ラハブも、あの使いの者たちを家に迎え入れ、別の道から送り出してやるという行いによって、義とされたではありませんか。26魂のない肉体が死んだものであるように、行いを伴わない信仰は死んだものです。

【福音書日課】マルコによる福音書 12章18～27節

18復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。19「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。20ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さずに死にました。21次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さずに死に、三男も同様でした。22こうして、七人とも跡継ぎを残さずして死にました。最後にその女も死にました。23復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」24イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。25死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。26死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。27神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

創世記 15章1～18節

1これらのこのの後、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。私はあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」²アブラムは言った。「主なる神よ。私に何をくださるのでしょうか。私には子どもがいませんのに。家の跡継ぎはダマスコのエリエゼルです。」³アブラムは続けて言った。「あなたは私に子孫を与えてくださりませんでした。ですから家の僕が跡を継ぐのです。」⁴すると、主の言葉が彼に臨んだ。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなた自身から生まれる者が跡を継ぐ。」⁵主はアブラムを外に連れ出して言われた。「天を見上げて、星を数えることができるなら、数えてみなさい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」⁶アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

⁷主は言われた。「私はこの地をあなたに与えて、それを継がせるために、あなたをカルデアのウルから連れ出した主である。」⁸アブラムは尋ねた。「主なる神よ。私がそれを継ぐことを、どのようにして知ることができましようか。」⁹主は答えられた。「三歳の若い雌牛、三歳の雌山羊、三歳の雄羊、それに山鳩と鳩の雛を私のもつに持って来なさい。」¹⁰アブラムはこれらのものをみな持って来て、真ん中で二つに切り裂き、切り裂いたものを互いに向かい合わせて置いた。鳥は切り裂かなかった。¹¹猛禽がこれらの死体の上に降りて来ると、アブラムはそれらを追い払った。

¹²日が沈みかけた頃、アブラムは深い眠りに落ち、恐怖と深い闇が彼を襲った。¹³主はアブラムに言われた。「あなたはこのことをよく覚えておきなさい。あなたの子孫は、異国の地で寄留者となり、四百年の間、奴隷として仕え、苦しめられる。¹⁴しかし、あなたの子孫を奴隷にするその国民を、私は裁く。その後、彼らは多くの財産を携えてそこから出て来る。¹⁵あなた自身は良き晩年を迎えて葬られ、安らかに先祖のもとに行く。¹⁶そして、四代目の者たちがここに戻って来る。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである。」¹⁷日が沈み、暗くなった頃、煙を吐く炉と燃える松明がこれらの裂かれた動物の間を通り過ぎた。¹⁸こうしてその日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの地を与える。」

ヤコブの手紙 2章14～26節

¹⁴私のきょうだいたち、「私には信仰がある」と言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、その人を救うことができるでしょうか。¹⁵もし、兄弟か姉妹が、着る物もなく、その

日の食べ物にも事欠いているとき、¹⁶あなたがたの誰かが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖まりなさい。存分に食べなさい」と言いながら、体に必要なものを与えないなら、何の役に立つでしょうか。¹⁷同じように、信仰もまた、行いが伴わないなければ、それだけでは死んだものです。

¹⁸逆に、こう言う者もいるでしょう。「あなたには信仰があり、私には行いがある。行いのないあなたの信仰を見せてください。そうすれば、私も行いによって、私の信仰を見せましょう。」¹⁹あなたは、神はただおひとりだと信じています。それは結構なことです。悪霊でもでさえそう信じて、身震いしています。²⁰ああ、愚かな者よ、行いのない信仰は役に立たないということを知りたいのですか。²¹私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇に献げたとき、行いによって義とされたではありませんか。²²あなたの見ているとおり、信仰が彼の行いと共に働き、信仰が行いによって完成されたのです。²³こうして「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」という聖書の言葉が実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。²⁴これで分かるように、人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません。²⁵同様に、遊女ラハブも、あの使いの者たちを家に迎え入れ、別の道へ送り出したとき、行いによって、義とされたではありませんか。²⁶霊のない体が死んだものであるように、行いのない信仰もまた死んだものです。

マルコによる福音書 12章18～27節

¹⁸復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。¹⁹「先生、モーセは私たちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄のために子をもうけねばならない』と。²⁰さて、七人の兄弟がいました。長男は妻を迎えましたが、子を残さないで死にました。²¹次男が彼女を妻にしましたが、子を残さないで死に、三男も同様でした。²²こうして、七人とも子を残しませんでした。最後にその女も死にました。²³復活の時、彼らが復活すると、彼女は誰の妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」²⁴イエスは言われた。「あなたがたは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。²⁵死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天の御使いのようになるのだ。²⁶死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の箇所、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『私はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。²⁷神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたがたは大変な思い違いをしている。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・11月7日「降誕前第7主日」の日課主題は「神の民の選び(アブラハム)」。旧約聖書日課は、「創世記」から、アブラハムが実子誕生の約束を神から告げられる場面の箇所。使徒書日課は、「ヤコブの手紙」から、パウロとは異なる視点で「創世記」のアブラハムについての聖句を引用して教える箇所。福音書日課は、「マルコ福音書」から、神殿で主イエスがサドカイ派の人々との間で「復活」に関する問答をされた場面の箇所。

・当日は、11月第1日曜日の「聖徒の日」。多くの教会で「永眠者記念礼拝」等が守られるが、石神井教会ではすでに10月中旬に「在天会員記念礼拝」として記念のときを持った。

旧約日課(創世記15章より)

・「創世記」は3主日続けて旧約日課として設定されており、緒論は前々回の資料を参照。

・日課箇所は、アブラハムに対して神が実子誕生の約束を告げられる場面で、後半(7節以下)は、ある種の契約締結式を思わせる叙述となっている。

・「アブラハム物語」(創世記12~25章)の中で、アブラハムに対する神の契約的言質は、断続的に告げられており、一箇所に限定して論ずることは難しい。とは言え、それらを貫く一定の内容があることは明白で、端的に言えば、①「土地取得の約束」と、②「子孫繁栄の約束」に換言されるであろう。しかし、より根源的な神学的問題として問われるのは、神がアブラハムにこのような約束を告げ、契約関係を結んでくださったというときに、それは何故であるかということである。「アブラハム物語」冒頭(12章)で、神は、「祝福の約束」と共に、アブラハムをご自身の導かれる旅へと呼び出され、アブラハムはそれに応じて旅を始める。その場面を見る限り、神がアブラハムに対して「祝福の約束」を与えてくださったのは、アブラハムが神の告げる言葉に対して従順であったからだと解釈しうる。しかし、「アブラハム物語」の全体を通してアブラハムが常に従順であったわけではなく、むしろ多くの場面で彼は、神の指し示されることを尋ねるより先に自分自身の判断で行動を起こしている。そして、それにもかかわらず、アブラハムは、神からの「祝福の約束」を一度も反故にされることなく、いつも神との「契約」関係の内に留められているのである。

・このような問題に対する解釈に一定の方向性を示していると考えられてきたのが、6節「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」である。この句は、パウロ書簡(ロマ4:3,9,22、ガラ3:6)や「ヤコブの手紙」2:23で引用されている。しかし、原文は、意味解釈上曖昧さがある。この句を原文直訳すると、「そして彼は、主に確信を置いた(アーマン)。そして彼はそのことを義(ツェタカー)にあるものと考えた」となる。

この原文は「彼」が「アブラム」と「主」のいずれを指示するかという解釈によって、意味が変わってくる。つまり、伝統的な解釈に従って「アブラムは主に確信を置いた。そして、主はそのことを(アブラムの)義にあることと考えた」とすることもできるが、「アブラムは主に確信を置いた。そして、主はそのことを(ご自身の)義にあることと考えた」と解することもでき、さらに、「アブラムは主に確信を置いた。そして、アブラムはそのことを(自分にとって)義にあることと考えた」とも、「アブラムは主に確信を置いた。そして、アブラムはそのことを(神にとって)義にあることと考えた」とも解される。

使徒書日課(ヤコブ2章より)

・「ヤコブの手紙」は、冒頭(1:1)に差出人として「ヤコブ」の名が記されており、その名でよばれてきた。この「ヤコブ」は、十二使徒の中の二人の「ヤコブ」(「ゼベダイの息子でヨハネの兄弟であるヤコブ」と「アルファイの子ヤコブ」)のいずれでもなく、「主の兄弟ヤコブ」(ガラ1:19)のことと解されてきた。「主の兄弟」は、「福音書」によれば少なくとも4人いたと考えられるが(マコ6:3など)、少なくともそのうちの二人、「ヤコブとヨセフ」は、主イエスの宣教活動に同行して(マタ27:56)、初代教会の弟子集団に加わったと推認される(1コリ9:5)。「主の兄弟」らが主イエスの宣教活動に同行したのは、必ずしもその活動に賛同したからではなく、兄である主イエスの活動に関する悪評を心配して母マリアと共に連れ戻しに行ったところ、それに失敗し、活動に付き添って行かざるを得なくなったものと考えられる。そのような「主の兄弟ヤコブ」は、パウロが宣教活動を始めて使徒たちと交流を持つようになった頃には、すでにエルサレム教会で「柱と目されるおもだった人たち」(ガラ2:9)の三人に数えられていた。初代教会で当初、「柱」となったのは、「ペトロ=ケファ」および「ゼベダイの息子ら、ヤコブとヨハネ」の三人であったと考えられ、「共観福音書」は、この三人が主イエスの宣教活動中も側近中の側近であったと伝えている。ところが、この三人の内、「ゼベダイの子ヤコブ」は、比較的早くに殉教したと考えられる(使徒12:1~2)。「主の兄弟ヤコブ」が「柱と目される」ようになったのは、この「ゼベダイの子ヤコブ」の代りになり得るとみなされたためであるのは間違いないが、それにしても、主イエスの公生涯中に彼が「弟子」らしい活動をしていたことなどは、「福音書」から一切知られない。ただ、パウロは、彼が自分と共に、使徒らの経験した主イエスの「復活顕現」の証人であると伝えており(1コリ15:7)、「復活証言」を語れることが「主の兄弟ヤコブ」の使徒に準ずる地位を得させたことと推認することはできる。とは言え、「ヤコブの手紙」から、著者ヤコブの「復活証言」を読み取ることはできない。本書簡から見られるのは、行き過ぎた「パウロ主義」に対して警告を与えることと、「パウロ書簡」の言説の曲解を正そうとする意図である。

福音書日課(マルコ 12 章より)

・日課箇所は、「受難物語」の一部として構成されており、神殿境内でユダヤ教諸派と論争を重ねた場面の一つ、サドカイ派の人々との間でなされた「復活」に関する問答の場面である。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)の並行記事で、内容も重要な相違は見当たらない。主イエスの教えとしてまとめられている部分の意味は必ずしも明瞭なものではなく、使信としての曖昧さを有しながらも「イエス語録」伝承として確定されたものであったために保存されているのだろう。

・「サドカイ派」は、当時のユダヤ教社会で公的に制度化されていた「神殿」を核とする社会制度において、その「神殿」を権力基盤とする祭司身分の者やレビ人らの党派。「サドカイ」の呼称は、ダビデ王がエルサレムに都を置いた時期に登場する祭司「ツァドク」に由来するとされる。「ツァドク」は、「アロン家」の末裔とされるが、それまで大祭司を継承してきた「アロン本家」にとって代わる形で現れ、「ソロモン王」への王位継承で重要な役割を担ったと考えられる人物。つまり、「王家」と強く結びついた「祭司」集団として構成されていたのが「サドカイ派」であった。「新約」が伝える限りでも、「サドカイ派」は、庶民生活を活動基盤としていた「ファリサイ派」と対立しているが、これは、神学的主張のみならず、支持する社会層の違いによる側面が強い。特に対立点として挙げられるのが「復活信仰」で、「ファリサイ派」が「終末の復活」信仰を有していたのに対して、「サドカイ派」はそれを認めていなかった。「終末の復活」信仰には、たとえ「終末」のこととは言え、社会秩序の逆転という思想が含まれるからであり、体制派の「サドカイ派」には認められない考えとされたのだろう。「サドカイ派」は、むしろ現世における「神殿信仰」に救いと利益があることを説くことで、「エルサレム(神殿)」の観光地化を進めたヘロデ王家と利害が一致していたのであろう。

・日課箇所ですアドカイ派の人々が持ち出しているのは、「レビラート婚」と呼ばれる制度で、「律法」に規定があり(申命記 25:5)、「ルツ記」は、この制度に基づく家名存続のためにモアブ人のルツがユダヤ人の姑ナオミのもとに留まったとされているものである。この制度は、日本では「もらい婚」/逆縁婚)などと呼ばれ、近年まで風習として広く認められていた。

・ここでの主イエスの「復活」に関する言説は、「終末の復活」について語っているようだが、同時に、それとは異なる新しい「復活」観を提示しているようにも見える。あるいは、弟子たちが主イエスの「復活顕現」として経験したような「復活」思想が想定されているのかもしれない。

来週の誕生日 (11月7日~13日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-227 番「主の真理は」(= I-85 番「主のまこと」)は、明治初期の日本人作(国学を学び半キリスト教の意図で教会に潜入した結果信仰を持ち、キリスト教学校で教えながら讃美歌集編纂に携わった松山高吉と推定)の歌詞が原詞。1903 年版『讃美歌』以来、ユダヤ教聖歌の曲と組み合わせられた。
- ・21-425 番「こすずめも、くじらも」は、1983 年、米国ミズーリ州のコンコーディア・ルーテル教会の設立 110 周年記念のために新しく作られ(作詞作曲は 82 番「今こそここに」と同じコンビ)、後に諸教派の讃美歌集に採用された。
- ・21-460 番「やさしき道しるべの」(= I 288「たえなるみちするべの」)は、19 世紀英国教会司祭からオクスフォード運動を経てカトリック司祭に転じ晩年は枢機卿にも任じられた、当代随一の説教家としても知られるジョン・ヘンリー・ニューマンが、32 歳で病氣から回復した際に心境を記したとされる詩を、讃美歌編纂者が讃美歌用に採用した歌詞。後に、同時代の英国教会司祭で教会音楽家としても多数の作曲をしたジョン・B・ダイクが、この歌詞のために作曲したところ、広く歌われるようになった。

21-425「こすずめも、くじらも」

God of the Sparrow

1. God of the sparrow / God of the whale / God of the swirling stars / How does the creature say Awe / How does the creature say Praise
2. God of the earthquake / God of the storm / God of the trumpet blast / How does the creature cry Woe / How does the creature cry Sorrow
3. God of the rainbow / God of the cross / God of the empty grave / How does the creature say Grace / How does the creature say Thanks
4. God of the hungry / God of the sick / God of the prodigal / How does the creature say Care / How does the creature say Life
5. God of the neighbour / God of the foe / God of the pruning hook / How does the creature say Love / How does the creature say Peace
6. God of the ages / God near at hand / God of the loving heart / How do your children say Joy / How do your children say Home

21-460「やさしき道しるべの」

Lead kindly Light, amid the encircling gloom

[Refrain] Lead, kindly Light, amid the gloom of evening. / Lord, lead me on! Lord, lead me on! / On through the night! On to your radiance! / Lead, kindly Light! / Lead, kindly Light, kindly Light!

1. The night is dark, and I am far from home, / Direct my feet; I do not ask to see / The distant scene; one step enough for me. / So lead me onward, Lord, and hear my plea.
2. Not always thus, I seldom looked for you, / I loved to choose and seek my path alone. / In spite of fear, my pride controlled my will, / Remember not my past, but lead me still.
3. So long your pow'r has blest me on the way, / And still it leads, past hill and storm and night! / And with the morn, those angel faces smile, / Which I have loved long since, and lost a while.